加速 北の拠点 下

―トヨタ東日本誕生へ

未来の技術 開発本格化

次世代

実験室にセットされた乗用車のアクセルを踏むと、前方のスクリーンに映し出された風景が動きだす。

岩手で共同研究

「リアルタイム運転シミュレータ」。雨天など多様な条件下で模擬走行し、実際の運転と同様の効果を検証できる。車を制御するソフトウエアなど次世代車開発に欠かせない。

岩手県立大（滝沢村）は昨年秋、県などと共同で新たな研究拠点「いわてものづくり・ソフトウエア融合テクノロジーセンター」を開設した。センター長の沢本潤教授は「開設9カ月。研究は既に自動車関連だけで10を超えている」と話す。

その一つが地元のソフト開発ジェーエフピー（盛岡市）との共同研究。ハンドル操作なしでも、センサーがドライバーの肩などの動きを感知してタイヤを動かすなど、体の不自由な人が運転できるシステムを目指す。

シミュレーターを使い、開発中のシステムで実際に運転可能かどうかを確認した。ジェー社の鈴木和浩CG事業部長は「これまで地元では実験ができなかった。研究拠点新設で開発スピードが上がった」と話す。

「裾野広げたい」

東北の拠点化を進めるトヨタは、東北の研究機関などに大きな期待を寄せる。円高対応のコスト削減という狙いに加え、世界の次世代車市場の覇権争いでも、需要拡大が見込める分野で新技術を開発し、主導権を握ることが競争力を高める。

トヨタ自動車東日本（宮城県大衡村）の初代社長に就任する白根武史トヨタ顧問は「東北の産学官による技術開発に感心している。岩手、宮城両県で新技術開発の裾野を広げたい」と話す。

産学官の取り組みは本年度、一段と本格化する。岩手では県立大などが多機能携帯電話（スマートフォン）で電気自動車（EV）のスイッチを入れたり、鍵をロックしたりする研究などに乗り出す。

宮城では東北大未来科学技術共同研究センターが中心になり、次世代車技術の実証試験を行う研究開発拠点を多賀城市に新設する予定。EVの新たな給電システムの実現などを目指す。

英知結集不可欠

東北大では水素と酸素を反応させた電気で走る燃料電池車の研究も始まっている。折茂慎一金属材料研究所教授が取り組む水素の固形化だ。

水素ガスを高密度で閉じこめるには重いタンクが必要だが、粉末など固形にできれば、タンクは不要になる。

2003年からはトヨタグループの豊田中央研究所（愛知県長久手町）とも共同研究を進める。折茂教授は「20年を目標にぜひ実用化したい」と見据える。

さまざまな状況下で運転実験できるシミュレーター。東北で次世代技術の研究が加速する＝岩手県立大

次世代技術の開発には英知の結集が必要だ。岩手県立大の沢本教授は「互いの強みを生かし、他大学などとも連携したい。オール東北の視点が大切になる」と強調する。

トヨタ東日本は小型車生産を担う拠点としてスタートする。東北が世界と戦うには、新会社と共に次世代の需要をつかみ、対応技術を確立することが欠かせない。東北の総力が自動車産業と地域の新たな未来を導き出す。